

# 宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36 宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319  
☎ (0198) 31-2320

イーハトーブの冬 ～五感で味わう世界～



雪渡り「キックキックトントン2」

写真提供：瀬川 強（西和賀町在住）

.....  
お日様がまっ白に燃えて百合の白いを撒きちらし又雪をきらきら照らしました。  
本なんかみんなザラメを掛けたように霜でびかびかしています。  
「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」  
.....  
四郎とかん子とは小さな雪沓をはいてキックキックキック、野原に出ました。

## 「毒」を知り、「毒」を打つ

大妻女子大学 安藤 恭子



宮沢賢治記念館に人が来なくなったら、もう「文学」はだめかもしれない—こうした声を近代文学の研究者から聞くことがあります。この声は、全国の文学・文学者関連の記念館・文学館が危機的状況にあるという認

識から生まれたものです。たしかに、入館者の減少、施設の維持費・老朽化にともなう改修費を賄う予算の問題など、今後の見通しは楽観視できません。そうした中で、宮沢賢治記念館は、全国で唯一安定した事業展開をおこなっている「最後の砦」のように見えるのかもしれませんが。

もちろん、宮沢賢治記念館の関係者の方々のご苦心、「宮沢賢治」という継承すべき文化に対する岩手県花巻市のご理解と多大なるご支援、それを根底から支え続けていらっしゃる宮沢家の皆さま

んの思い、それらがあって長い間存続する場があるわけではあります。言うまでもありませんが、「宮沢賢治」さえあれば、読者・愛好者の方々、また、はじめて「宮沢賢治」にふれる方々が集う場が簡単に成り立つわけではありません。

では、日本の「文学」をめぐる状況は、今後どうなっていくのでしょうか。この問題に、「宮沢賢治」はまったく関係がないのでしょうか。残念ながら、それもそう楽観はできないように思えます。

まず、日本の教育をとりまく状況が、「文学」にとってたいへん厳しいということがあげられます。「国語」という教科における「文学」の地位は、低下の一途をたどっていると言わざるを得ません。「論説文」などの論理的思考力に直結する文章が増加するのに対し、「文学」の占める割合が減少していくことは既定の方向です。文系の大学にも理系の力を強化するようにカリキュラムを変えろ、などという経済界の声が報道されることがありますが、教育は労働力を確保するためにこそある、という露骨さには驚かされます。もちろん、社会で活動する力を養うことは大切なことです。しかし、そのためにこそ、自分の人生を自分で築く自主性と創造性、他者とともに生きるための公共性が求められるのであって、「考えない」「使いやすい」「上からの命令なら論理的に嘘をつける」ような人材を育てることが教育の使命ではないはずで

「文学」、とりわけ近代文学は、社会における弱い立場の人々を取り上げることが多々あります。「近代文学の始まり」を告げる作品ともいわれる二葉亭四迷「浮雲」の主人公は、上司におべっかを使えないために疎まれて、リストラされてしまう人物です。こうした人物のある種の悲劇は、いわゆる「勝ち組」には見えない時代の問題、社会の矛盾、人間の残酷さを読者に知らせ、考えさせるものとなっています。しかし、私たちが生きる現代の日本には、こうした「文学」を重要なものとしてとらえる土壤があるのでしょうか。

たとえば、『万引き家族』（是枝裕和監督）という映画がアメリカのアカデミー賞候補になると、「こんな家族は日本にはない。日本の恥さらしだ」という声がインターネット上に飛び交いました。時代や社会、人間のもつさまざまな側面を多くの人々に知らせ、問題を共有することから、新しいより良いもの導き出そうという思考が薄れ、自分

をひたすら肯定したい、他者から承認されないと他者を否定する側に回ろうとする傾向は、「文学」「映画」などの表現のもつ可能性を歪めるもののように思えます。また、そうした表現を受容し、自分の問題として自分自身につきつける力が、現代社会の中で次第に弱まってきたのではないかとも思えます。

翻って、「宮沢賢治」の作品群はどうでしょうか。それらにみられる冷徹な社会批評、生き物のもつ残忍さ、肥大した欲望の招く悲劇……。こうしたものがこれでもかと描かれた上に立って、さらにフィクションとして昇華させた「銀河鉄道の夜」「セロ弾きのゴーシュ」などの諸作が、幾度もの推敲を経て形作られているのです。しかし、こうした総合的な認識の実験と深化を受容する力、また、こうした営為を追体験する重要性を主張する力を、これからの日本の社会の中でどれだけ熟成させていくことができるのでしょうか。

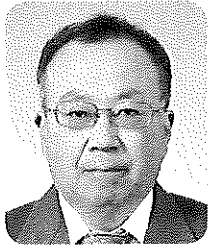
飛躍するかもしれませんが、仏教の祖であるゴータマ・シッタールタが、インドの王子としての恵まれた出自から外へ出ていくために最初に経験したことは、「嘆き」です。なぜ、小さな命が大きな力によって奪われるのか。この世は、なぜ苦しみに満ちているのか。その因果を明らかにするために、人の欲望のありさまと「苦」の内実を事細かに体系化していく仏教の成り立ちは、フィクションの力を考える上でも興味深いものです。

「毒もみのすきな署長さん」は、地獄に落ちるのでしょう。しかし、「署長さん」の存在は、私の中にリアルに生きています。「毒」を知り、「毒」を打つ、そして、「私」を打つ。そこにこそ、一つの希望と喜びの芽のようなものがあること。これが私にとっての、「文学」に関わる、また、「宮沢賢治」に関わり続ける意義であると思うのです。



## 黄瀛に導かれて

岩手大学 佐藤 竜一



どうして宮沢賢治を熱心に読むようになったのですか。時々、そう問われることがあります。どうしてなのか、考えてみると、やはり黄瀛との出会いが強く影響していると思います。

黄瀛のことを初めて知ったのは、大学を卒業して数年後、1984年ごろのことです。私は編集者としての力量を高めるため、夜高田馬場にあった日本ジャーナリスト専門学院に通っていましたが、そこで堤照実さんとの出会いがありました。堤さんはかつて筑摩書房の校正課長をしていて、『宮沢賢治全集』の編集にも携わったことがありました。

一方、私は当時中国研究者の新島淳良さんの私塾にも通っていて、魯迅を原文で読んでいました。堤さんとは講義終了後雑談するのが常でしたが、中国のことが話題になったある日、堤さんは「そうそう、賢治にも中国人の友人がいたのです。黄瀛という人です。もう生きていないのかも知れませんが」とつぶやいたのです。コウエイ、初めて聞いたその名が不思議に心に刻まれました。

数年後、ふとしたことがきっかけで知り合った中国中央テレビのディレクター・孫岩が日本にやってきた際、たまたま黄瀛のことを話題にすると、孫岩は黄瀛の番組を作ったことがあるといいました。重慶の四川外語学院で日本語や日本文学を教えていると、健在なこともわかりました。おまけに、孫岩は四川外語学院の近くにある西南政法学院には親しい友人がいるから、会いたいのなら橋渡しをしてあげよう、そうもいうのです。初めて名前を知ったときはまさか会えるとは思わなかった詩人・黄瀛がにわかに身近な存在に思えてきました。

私は1992年8月10日、勤めていた出版社から休暇を取り、孫岩の勧めで重慶に行き、黄が教鞭を執る四川外語学院（当時）の教員宿舎で初めて黄瀛に会うことができました。黄は私が岩手出身だとわかると饒舌になり、賢治や高村光太郎、草野心平などとの交際について次から次へと話し続けました。1929年6月に初めて花巻を訪れ、賢治と会った時の話は特に印象に残りました。

私は帰国後、黄瀛の周辺への取材を重ね、1994

年に初めての単行本『黄瀛－その詩と数奇な生涯』（日本地域社会研究所刊）を出版しました。その本を書いた後、今度は賢治について調べてみようという調査を重ね、翌年同じ版元から『宮沢賢治の東京』を出しました。

同郷というだけで、それまで「銀河鉄道の夜」とか「よだかの星」くらいしか読んでことがなかった私は次第に賢治にのめりこむことになりました。2008年には『宮澤賢治 あるセールスマンの生と死』（集英社新書）を出版し、そのことがきっかけとなり岩手大学で賢治について教えることになりました。

2016年は賢治生誕120周年の節目の年でした。この年、私は宮沢賢治学会イーハトーブセンターの理事として、ほかの理事の協力を得て、企画展「黄瀛展」を実現させました。黄瀛は賢治より10歳年下で、この年は黄瀛生誕110周年でもありました。私は以前に出版した本を増補して『宮沢賢治の詩友・黄瀛の生涯』（コールサック社刊）として出版できました。

2016年10月22日、重慶の四川外国語大学で黄瀛生誕110周年を記念して国際シンポジウム「方法としての越境と混血」が開催され、私は王敏、岡村民夫（共に法政大学教授）らとともに招かれましたが、伝記作家としての立場から黄瀛との出会いについて語りました。

会場には日本語・日本文学を学ぶ中国人を中心に80人ほどが集まっていて、私の話を熱心に聞いてくれました。黄が日本語や日本文学を教え始めたのは1979年ごろのことで、その時に真っ先に教材に取り上げたのが賢治の「雨ニモマケズ」だったと聞いたことがあります。その時から、37年が経過していました。

最初のころの教え子が王敏で、以後たくさんの中国人が賢治作品に触れました。中国人の賢治研究者も増えていて、作品の中国語訳も盛んになってきています。中国における賢治研究のタネをまいたのが黄瀛でした。私は、国際シンポジウムへの参加を通して、そのタネが着実に花を咲かせたのを実感することができました。

私と黄瀛との出会いについて簡潔に紹介してきましたが、これまでの歩みを思うと不思議な気持ちになります。黄瀛との出会いがなかったら、賢治の作品を熱心に読むことはおそらくなかっただろう。確かにそう思うのです。

## 宮沢賢治と『アザリア』の友たち

さいたま文学館 大明 敦



小学校4年生の国語の授業で「雪渡り」を習ったのが、私と賢治との出会いでした。もう半世紀も前になりますが、子供心にその世界観や話の面白さに感動したことは、はっきりと覚えています。でもそのころは理科

が一番得意で、国語はどちらかといえば苦手な方でしたから、まさか自分が将来文学館の学芸員になって賢治に関する展示を何回も手がけることになろうとは夢にも思っていませんでした。紆余曲折はありましたが、あの時の「雪渡り」への感動がなかったら今とは違った道を進んでいたかもしれないなあ…などと思いつつ、宮沢賢治記念館の童話「雪渡り」展を拝見させていただきました。

宮沢賢治も、自分の将来や仕事についてさまざまなことを考えてきました。父のような立派な商人になりたいと作文に書いたり、東京で人造宝石を作ろうとしたり、農学校の教師になったり、一人の農民や碎石工場の技師として生きようとしたり……等々。しかし、その一方で文学作品は終生書き続け、没後に詩人や童話作家として広く世界的に知られるようになったことは、言うまでもありません。

賢治が文学に目覚めたのは、盛岡高等農林学校在学中のことです。短歌は石川啄木の母校でもある盛岡中学校時代に作り始めていましたが、盛岡高等農林学校では同人誌を発行して作品を発表し、仲間たちと文学を語り合うようになりました。その同人誌の名は、『アザリア』。会員は12、3人いたそうですが、中心となっていたのは保阪嘉内・小菅健吉・河本義行そして賢治の4人。そう、あのよく目にする写真の人たちです。『アザリア』の創刊は大正6年7月1日で、翌年6月にかけて全6号が発行され、賢治はどの号にも短歌や散文などを載せています。この多感な青春期の文学体験こそが、賢治を詩人・童話作家へと導く契機になったのではないかと私には思えるのです。そこで、賢治と『アザリア』の友たちについて少し探ってみることにしましょう。

大正5年4月、2年生となった賢治は、この年に入学してきた保阪嘉内と寮で同室になりました。

甲府中学校時代から短歌を詠み啄木に憧れを抱いていた保阪と、啄木の後輩で自らも短歌を作っていた賢治。この二人がすぐに意気投合したことは想像に難くありません。保阪との出会いが、賢治の気持ちを文学へと向かわせていったのではなかったのでしょうか。そして賢治の級友で、詩や短歌を作っており、一足先に『校友会々報』の「文苑」への投稿も始めていたのが小菅健吉。小菅が4人の中ではリーダー格だったようです。もう一人の河本義行は保阪と同学年で、既に倉吉中学校時代から荻原井泉水に師事し、「緑石」の号で本格的に自由律俳句を作っていました。

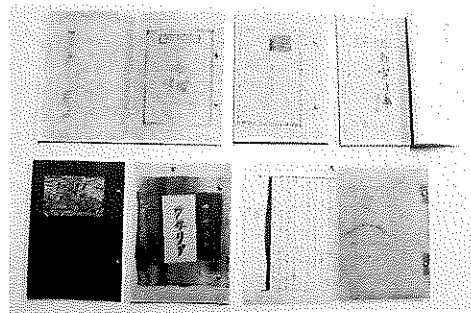
盛岡高等農林学校の中で文学好きの学生は限られていたでしょうから、この4人は連鎖的につながっていき、互いに共鳴や影響しあうようになっていったと推測されます。賢治の短編「秋田街道」は、『アザリア』創刊のころの4人の思い出（雫石への徒歩旅行）を題材にした後年の作品ですが、4人はそれぞれ大正6年7月18日発行の『アザリア』第2号に「秋田街道」と題材を同じくする作品を載せており、交友の様子がうかがえます。

また、初めて活字になった賢治の作品は、大正5年11月25日発行の『校友会々報』第32号の「文苑」に掲載された短歌「灰色の岩」でした。「灰色の岩」は修学旅行や地質旅行の際の旅詠など29首をまとめたものですが、賢治は「健吉」の名でこれを載せ、逆に小菅健吉が賢治の名を使って詩「初夏雨の日に」や短歌「初夏」を載せていますので、賢治の投稿には小菅の働きかけがあったように想像されます。この号には河本義行も自由律俳句「あさひあさひ」を載せており、保阪嘉内の作品の掲載こそありませんが、後の『アザリア』の中心メンバーが「文苑」の欄を独占している感がありますので、このころから4人の結束が始まっていったのではないのでしょうか。

こうしてみると、何気ないような出会いや出来事が、後の人生に大きな意味を持つてくることがあるように思われます。賢治がもし盛岡高等農林学校に進まなければ、そこでもし『アザリア』の友たちと出会っていなければ、その人生は大きく変わっていたかもしれませんし、詩や童話を書いたとしても作風が異なっていたかもしれません。そして誰にとっても、賢治と『アザリア』の友たちとの出会いのような経験が、人生のどこかにあるのかもしれませんが、『アザリア』を見ると、ふ

とそんなことを考えてしまいます。

宮沢賢治記念館の『アザリア』は、小菅健吉が度重なる転居の中で大切に守り続けてきたもので、6号すべてが揃っているのは奇跡のようにも思われます。このたび脱酸処理や修復が施され、長期保存が可能になりました。この6冊の『アザリア』が、これからもずっと出会いの大切さや不思議さを語り続けてくれることを願っています。



## わたしの宮沢賢治

### ON UNEVEN GROUND を読む。

金石市在住 赤崎 学

ホイト・ロング氏の宮沢賢治論を読んだ。ロング氏は、現在、シカゴ大学東アジア言語文化学科の日本文学の准教授である。著作は、2012年にスタンフォード大学から出版されたものである。間違いなく、この分野の記念碑的な著作であろう。この著作の末尾に文献表があるが、それは日本語ソースのもの、英語ソースのものに分かれている。そうして、英語ソースのそれには、フォーコーやベンヤミンという名前がならぶ。これまでの外国人による賢治論は、その代表例としてマロリ・フロムのそれを挙げるが、基本的には日本の知的サークルのなかで書かれたものであった。つまりは、日本人の書いたものと、それほど差はなかった。しかし、ロングの賢治論はやはり違う。この著作は、完全に現在のアメリカのアカデミズムの「日本文化研究」の関心の中で書かれており、素材としての賢治もそのような扱いを受けている。自分の関心を惹くことを書いておくと、文学のテキスト研究というよりも、文学を素材にすえた、レイモンド・ウィリアムス的な文化社会学的な視点で書かれていることを、注目しておきたい。その分、あるべき賢治文学に割かれる作品分析は、「雪わたり」「風の又三郎」「ポランの広場」などがとりあげられているだけであり、決して多くはない。

ロングがとりわけ追求するのは、賢治文学を通しての近代社会の「地方性」の問題である。冒頭、現在の銀座にある岩手のアンテナショップ「岩手銀河プラザ」の描写からはじまり、それが1921年9月に同じ銀座三越で開催された「東北物産陳列

会」の、話題に移る。すなわち近代日本で、岩手や東北といった地方性が、商品価値を持ち出したのは、1920年代であるという認識が著者にはあり、それが賢治の登場と重なるわけである。そうして全7章のうち、白眉をなす第6章では学生演劇の指導者としての賢治、第7章では「農民芸術概論」の農村指導者としての賢治がとりあげられる。すなわち地方性が問題になり始めた時代に、実際の地方の文化人としての賢治の生き方に焦点があてられる。

私は、必ずや翻訳されねばならない本と思う。現代アメリカの文学研究の、在りどころが鋭く提出されているからだ。ただし、ロングの視点を配慮したうえで、2点ほど意見を書いてみたい。一つはこの視点からは、詩人としての賢治像が、なかなか出てこないだろうと思う。もう一つ、賢治を同時代史に、還元する際に、宗教（国柱会との関わり）という面倒な手間のかかる問題を慎重に避けている感がある。ロング氏に問い直してみたいところである。

### 斉藤征義さんと宮沢賢治展

～賢治さんでつながる出会いに感謝～

旭川宮沢賢治研究会 奥山 真由美

私の賢治さんとの出会いは、子供時代に母に連れられて出掛けた、旭川の“まるせんデパート”で開催された「宮沢賢治展」でした。その頃の私には手帳や原稿用紙の展示内容がよく理解できませんでしたが、会場入り口にすすきが飾られ、銀河鉄道を想わせる列車の扉をくぐり抜ける仕掛けに心が躍ったものです。

成人後、夏休みに友人との鉄道旅行の途中で宮沢賢治記念館に立ち寄ったことがきっかけで、賢治さんに再会した私は、以後、花巻を頻繁に訪れるようになりました。

ある年、私が大の賢治ファンと知った穂別町(現：むかわ町穂別)在住の友人から、同じ職場にいらした賢治研究家の斉藤征義さんを紹介されました。私が旭川で見た「宮沢賢治展」は、当時、百貨店の催事に携わるお仕事に就いていらした斉藤さんが担当された展覧会であり、斉藤さんが清六さんの了解を得て宮沢家のお蔵から原稿や手帳の実物を借用した幻の企画展だったことを、その日初めて知りました。会場のオブジェも斉藤さんの発案だったのです。全国を巡回したその展覧会の最初の開催地が旭川だったそうです。

ほべつ銀河鉄道の里づくり委員でいらした斉藤さんのお誘いで、「ほべつ銀河鉄道の夕べ」にも参加させていただき、賢治観音や涙ぐむ目の花壇等を見学しました。地域の方々が一体となって「イーハトーブ」の実現をめざしている姿に触れ

ることが出来ました。

それから折に触れて、斉藤さんの講演や朗読を聴かせていただくようになりました。賢治研究家で、詩人で、映画の脚本家で、多彩な顔をお持ちの斉藤さんは、いつもエネルギーに溢れて、周りを明るくしてくださいました。

その斉藤征義さんが、今年1月6日にお亡くなりになりました。突然の訃報に言葉が見つかりません。もっと賢治さんのお話しを伺いたかった、もっと賢治作品の朗読をお聴きしたかったと思っても、今ではどれも叶いません。

振り返れば、斉藤さんがいらしたから、私は賢治さんと出会えました。そして、賢治さんとの出会いが、花巻の地を訪ねることにつながり、賢治さんを敬愛する多くの方々との出会いにつながりました。このような幸福をもたらしてくださった斉藤さんに感謝の気持ちでいっぱいです。そして、銀河鉄道に乗って旅だった斉藤さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

## 来館者の声

記帳ノートから

No.386 ~ 389 (平成28年9月18日~12月27日)

**宮** 沢賢治記念館と童話村を訪ねました。小学校教育員として一度生で見たかった賢治のイーハトーブの世界。とても美しく、夢があり、感動しました！今度「やまなし」の授業をする際に、今までと違った視点で賢治の世界を伝えられたら、と思います。

**今**日は主人と2人で、大好きな「賢治」記念館を堪能しました。日常忘れてしまっている「本当に大切なもの」を考えさせられました。爽やかな気持ちになれて、やっぱり来てよかったなど。けがれが少しとれたような気がします。「けがれ」を何とかしたくなったら、また来ようと思います。

**71**歳。やっと来ました！階段、きつかった(泣)秋の山々がとってもきれいです。キツかった！

**い**つか訪れたいと願っていました。その日が思いがけず今日になりました。賢治の息づかいが耳元で聞こえてきます。ああ、やっと逢えた…ちょうど陽が沈む時、山里に煙たなびき、川面が黄金に輝いています。思わず、合掌！！

**新**美南吉の故郷より来館。記念館と「賢治の学校」を見に、初めての岩手。人間と生き物が自然に話し合える、のどかで楽しい「イーハトーブ」はやはり強く惹きつけるものがある。賢治さんの作品もよいけれど、岩手の皆さんに南吉さんも知って頂けたなら幸いだ。「ごんぎつね」「雪渡り」、きつねが主人公の名作と思う。

**小**さい頃によく読んだ宮沢賢治さんの作品を思い出しながら、駅からの道のりを歩いてきました。童話の印象が強いのですが、農

業や教育、宗教など様々な分野で活躍されていたことを知りました。今後の生き方に迷っている折、一生懸命いろんなことに取り組むことの大切さを学びました。

**大**好きな童話「雪渡り」の展示を見に、久々に来館しました。景観がきれいで居心地がよく、賢治の世界観がにじみ出ているような場所ですね。(中略)多方面に関心を向け、作品や活動に生かす賢治にあらためて驚いています。「生活=芸術」ととらえる思考に大きく心を揺さぶられました。私事ながら、現在進路選択に悩んでいたのですが、賢治の生涯を知り、自分の将来に大きな参考となりました。あっ、

そうそう、「雪渡り」も作品の裏話が、より一層関心を高めてくれました。

**早**朝、山梨を出発し、この記念館に来ました。仙台を過ぎて岩手に入ると、急に視界が開け、遠くに雪を頂く「早池峰山」が見えました。古代からの信仰の山を毎日見ていた賢治の心の中では、宇宙の銀河からはるか古代までさかのぼる「大きな自然観」が見事に育まれたものと確信しました。

**A** very nice museum. I hope to return having read more of Miyazawa's work.  
from USA

## ■賢治の世界セミナー 2018

賢治が吸ったであろう同じ空気を吸い、同じ空を見上げ、そして同じ石ころを蹴とばし育ている花巻の子どもたち。そんな花巻の子どもたちに、賢治の思い描いたイーハトーブの世界を、また賢治の心の表出の数々を伝え繋いでいくことは、花巻に生きる私たち大人の果たすべき「役割」なのかもしれません。



ややもすれば難解と言われる賢治作品。「大人になって初めてわかった」「幼少期の読み聞かせや絵本の体験がよみがえった」という声もよく耳にします。学校の教材として取り上げられることの多い「やまなし」や「よだかの星」「雨ニモマケズ」などは、子どもたちの心の奥深くに刻み込まれているようにも思います。ここに、本セミナーを開催する意義を見出すことができるのではないのでしょうか。

今年度も、市内の小中学校から花巻農業高等学校まで16校(17会場)の開催希望があり、2,713人の受講者を数えました。耳をそばだて、瞳を輝かせ、時に身を乗り出して「賢治さんの世界」に浸りこもうとする子どもの姿をたくさん見ることができました。講師の皆様ものべ27名と1団体と、多様な作品や内容に応え得る充実の布陣だったと思います。

取り上げられた作品等をみると、「ゼロ弾きの

ゴージュ」や「どんぐりと山猫」などの人気作品に加え、どちらかというと子どもたちにはなじみが薄いと思われる「ひのきとひなげし」「虔十公園林」「気のいい火山弾」「いちょうの実」などが登場したのも今年度の特徴かもしれません。

## ■賢治の世界ワークショップ

in 陸前高田・釜石

11月3日、現在開催中の特別展「雪渡り」に登場する氷上山(陸前高田市)の麓にある氷上神社



を訪ね、宮司ご夫妻からお話を伺うことができました。続けて釜石では、宮沢賢治学会の赤崎学さんの案内を

頂き、賢治が度々訪れていた叔父・宮沢磯吉の旧居宮沢薬局跡地や陸中大橋駅近くの詩碑「峠」などを見学しました。晴天で紅葉が美しく海も穏やかなよい日に恵まれ、当時の賢治に思いを馳せながらも、講師の皆さんが話される震災時の様子やご苦勞に、一日も早い復興を願うワークショップとなりました。

## 童話「雪渡り」と藁の世界

新しい年が明けた1月19日、花巻市文化財保護審議会の阿部茂巳さんを講師に、藁細工を通して

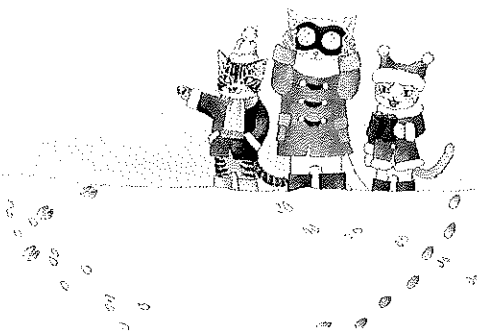
「雪渡り」に迫るワークショップを開催しました。阿部さんは賢治についても造詣が深く、「産室の嬰兒籠（えじこ）」「岩手山登山のわらじ」「羅須地人協会でのしべ（藁で作ったスリッパのようなもの）」など、楽しいお話の連続でした。余談と言いながら話された「『ヒドリ』阿部説」も大変興味深いものでした。講義の後には細ない体験。皆さん、手こずりながらも笑顔の絶えないひとときを過ごすことができました。



#### 冬の胡四王山散策

雪のない胡四王山の「冬」（2月2日）。案内は、森林インストラクターの高橋修さん。

4歳から70代まで幅広い年齢の皆さんが、サワグルミの「顔」や狐ならぬ「ウサギの足跡」などとの出会いと発見に、厳しい東北の冬を越え「眠りから覚めようとする山」「春の準備」を感じてくれた散策となりました。



#### ■特別展のお知らせ

##### 寓話「猫の事務所」

「猫の事務所」は賢治が生前に発表した作品で、雑誌「月曜」の第3号（大正15年3月）に掲載されました。「月曜」は詩人・尾形亀之助が創刊した雑誌で、創刊号では「オツベルと象」、第2号に「ざしき童子のはなし」も掲載され、生前はほとんど発表されなかった賢治の作品が三度も取り上げられたのは、とても興味深いことといえます。いずれの作品も発表時の原稿は現存しませんが、「猫の事務所」だけは先駆形態の草稿が残っています。この草稿を通じ、作品としての「猫の

事務所」はもちろん、尾形亀之助と賢治の関連についても紹介していきたいと思います。

**期間** 2019年4月27日(土)～7月15日(月)

直筆稿の公開は

① 4月27日(土)～5月6日(月・祝)

第1葉～第11葉

② 7月6日(土)～7月15日(月・祝)

第12葉～第22葉

※ 5月7日(火)、6月6日(木)、7月5日(金)

資料入替のため特別展示室を閉室

##### 童話【祭の晩】

【祭の晩】は秋祭りの夜が舞台の作品で、賢治も生前に親しんだ「花巻祭」を連想させます。展示期間中は、花巻市内で実際に「宵宮」や「花巻祭」が行われますので、作品の中に登場する「山男」の伝説なども合わせてお楽しみいただければと思います。童話の世界が身近なものとして感じただけの機会ですので是非ご覧ください。

**期間** 2019年7月20日(土)～10月27日(日)

直筆稿の公開は

9月14日(土)～9月23日(月・祝)

第1葉～第11葉

※ 9月13日(金)、9月24日(火)

資料入替のため特別展示室を閉室

##### 童話「貝の火」(仮称)

「貝の火」は主人公の子兎ホモイを通じ、善い行いをすれば善いことが自分におき、逆に悪いことをすれば、それが自分に返ってくるといった因果律をテーマとした作品です。

**期間** 2019年11月2日(土)～2020年5月10日(日)

直筆稿の公開など、展示の詳細については、次号121号（9月中旬発行予定）でご案内します。

#### \* 編集後記 \*

瀬川強さんの写真展「イーハトーブの冬 - 五感で味わう世界」(イーハトーブ館: 3月31日まで開催)を拝見しました。そこには、「雪渡り」「水仙月の四日」など、賢治の思い描いた「冬」の世界が広がり、私たちが暮らすこの地が、「こんなにも美しく、透きとおった、清らかなものであったのか」とあらためて深い感動を覚えました。

その感動を全国の皆さんにもお分けしたくて、瀬川さんに写真借用のお願いをしたところ、快くご提供下さいました。イーハトーブの素晴らしさの一端を感じていただけたならば幸いです。瀬川さんに心より感謝を申し上げますとともに、瀬川さんの次の言葉を添えて結びといたします。

「賢治さんを理解するには、自分でイーハトーブの野山を歩き、心に感じる事が大事。皆さんもぜひフィールドを歩いて下さい」